

## 【論文】

# 明治期のニーチェ主義と教育学 (3)

—ニーチェ主義者=登張竹風の教育観—

松原 岳行

## はじめに

日本の教育学がニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844-1900) の思想を本格的に受容しはじめたのは大正期のことであるが、ニーチェ論争とも称される明治期の美的生活論争それ自体がすでに教育学的意味を帯びていることはほとんど知られてこなかった。こうした問題意識から、前稿では、従来もっぱら明治期文壇のニーチェ論争として捉えられてきた美的生活論争を高山樗牛／林次郎 (1871-1902) と坪内逍遙／雄蔵 (1859-1935) の教育的対決として再解釈し、結論として、高山と坪内のニーチェ論争が実際には「ニーチェ」という記号を用いた青少年教育についての論争であったことを明らかにした<sup>註1</sup>。

さて、この美的生活論争において重要な役割を果たした人物として、独文学者の登張竹風／信一郎 (1873-1955) を挙げないわけにはいかない。というのも、登張は高山樗牛と並んでニーチェ主義者の代表的存在であり、後述するように、ある意味ではニーチェ論争としての美的生活論争の生みの親とも言えるからである。しかし、ニーチェの翻訳に従事した独文学者としてのイメージが強すぎるからか<sup>註2</sup>、登張はこれまでさほど重要な研究対象とは見なされず、関連する先行研究においても、「美的生活を論ず」の著者である高山の陰に隠れて副次的な取り扱いを受けることが多かった (笹淵 1953、修 2003、杉田 2010、清松 2022)。

そこで本稿では、登張竹風のニーチェ論とその意味を詳細に検討することとしたい。その際に考慮しなければならないのは、高山や坪内と同様、登張竹風にも教職従事経験があることと、美的生活論争そのものがニーチェ主義者 vs 反ニーチェ主義者の教育的対決という側面を有していることである。これらを踏まえるなら、ニーチェ読書による青少年の自己修養の可能性を説いた高山と同様、登張のニーチェ論にも教育学的な含意があるのではないか。以上の問題関心から、本稿では、登張竹風というニーチェ主義者がどのような教育観を有していたかという点に着目することで、明治期のニーチェ主義とその教育学的意味を考察する。

## 1. 美的生活論争以前の登張竹風

### (1) ニーチェへの接近

広島県出身の登張は、山口高等中学校時代に教育学者の谷本富／梨庵（1867-1946）と出会い、薫陶を受ける。1897年に東京帝国大学を卒業後、山口高等学校に教授として着任したが、1899年、恩師谷本の紹介で東京高等師範学校に転任する。

興味深いのは、登張が高山よりも早い時期にニーチェに言及していることである。ただ、登張はもともとニーチェに特段の関心を抱いていたわけではなかった。1934年に刊行された自伝的著作『人間修行』の中で登張は当時を次のように回顧している。「帝国文学といふ雑誌の編輯員になって、原稿を纏める役を仰せつかつた僕は、兎角論説欄の原稿が不足するので、それまで学校での義務的作文以外、文といふものを書いたことのない、また文章といふものに、毛頭自信のなかつた——今とてもない——僕がやむを得ずしやうことなしに、連載したのがハウプトマンとズーデルマンとの戯曲・小説の梗概とニーチェの学説の抜書であつた。」（登張 1934、235頁）——この回顧的証言を信じてよければ、登張は雑誌の紙面を埋める必要に迫られてニーチェに注目したことになる。

登張は1900年5月以降、「独逸の輓近文学を論ず」と題した論文を『帝国文学』第6巻第5号、第6号、第7号に連載する。これはドイツの自然主義作家ズーダーマンに関する論文であったが、その中で自ずとニーチェにも言及することになる<sup>註3</sup>。というのも、登張の見るところによれば、「今日の自然派の詩人にして、ニイチェの思想に感染せざるもの少なし」（登張1900c、15頁）という状況だったからである。では、登張はニーチェの思想をどう見たのだろうか。

たとえば『帝国文学』第6巻第7号では次のように述べている。「幸福を求むる人は満足よりも寧ろ威力を欲し、徳義よりも寧ろ器量を欲し、平和よりも戦争を冀ふ。此の如きは実に君子の道德なり、今日世人が喋々するが如き道德は、奴隸的の道德なり、弱者、怯者、貧者、賤者病人の道德なりと。ニイチェが極端なる個人主義善悪超絶の哲学は、此に於て立つ。ニイチェはこの論に依拠して、ルツマを以て教会に於ける奴隸的暴動の巨魁となして之を賤し、ナボレオンを以て、ヘレンメッシュを以て、君子人となして口を極めて讚歎す。」（前掲書、16頁）——このように、登張はニーチェの哲学を「極端なる個人主義」ないし「善悪超絶の哲学」と特徴づけた。興味深いのは、極端な個人主義というニーチェ理解が、美的生活論争における反ニーチェ主義者らの見解と一致するという点である。極端な個人主義としてのニーチェ思想に対して登張がどのような印象を抱いていたのかは不明だが、少なくともこの時点ではニーチェを肯定的に評価しようという姿勢や意図は見られない。

また登張は、ちょうど高山樗牛が「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」を発表した1901年1月、『帝国文学』第7巻第1号に「ニイチエの自伝」の翻訳を掲載し、文末にややフォントサイズを落として次のような一文を追記する。「訳者曰く。自から狂にあらずと絶叫せしニイチエその人は、終に狂人となりて、癲狂院に入り、昨年夏八月廿五日、溘焉として逝けるは、読者の了知せる所ならむ。」（登張 1901a、129頁）——後にニーチェ主義者を自認し、ニーチェ思想の教育学的意義を強調する登張であるが、当初は、ブーダーマンのニーチェ受容やニーチェの自伝の翻訳・紹介など、ニーチェとの関わり方も間接的かつ消極的なものであり、その関心もまだ通俗的なレベルを超えてはいないと言えよう。

## （2）登張のニーチェ論

その後、登張は徐々にニーチェへの関心を高め、1901年6月以降、「フリードリヒ、ニイチエを論ず」と題する論文を『帝国文学』誌上に連載する。「ニイチエは未だ伝へられざるなり。彼れ歿して後ち將に一年たらんとす、追懐敬慕の念已むこと能はず、終にこの一篇を草す。」（登張 1901b、2頁）——執筆の契機となったのは、非業の死から1年が経とうとしているにもかかわらず、ニーチェの思想がまだほとんど日本に紹介されていないという事実であった。

当時の日本にニーチェの思想が輸入されにくかったのには、それなりの理由があった。それは、ニーチェ思想の個人主義と大日本帝国の国家主義との不親和性である。登張は「序」の冒頭で次のように述べる。「今の世今の人に向て、ニイチエを論ず。これ豈に大なる迂拙児なるなからんや。世を挙つて国家主義帝国主義に狂奔せるは、吾国の現状なり。而してニイチエは極端なる個人主義の鼓吹家にあらずや。」（前掲書、1頁）——「迂拙」が世渡り下手な様子を指すことを踏まえれば、「迂拙児」とは、時代の雰囲気や世論を無視した言動をとる子どもという意味となろう。国家主義や帝国主義が全盛の時代にあつて、極端な個人主義を主張したニーチェを取り上げることは、世の趨勢に逆行することであり、社会全体を敵に回すことをも意味していた。いずれにせよ、登張はそのぐらいの覚悟を持ってこのニーチェ論を書いたのである。

では、登張が同調できなかつた世の趨勢とは具体的にどういう状況だったのだろうか。興味深いのは、登張が教育の現状を憂慮し、そのアンチテーゼとしてニーチェの名を挙げている点である。

*倫理の学は盛に行はれて、道徳は日々に壊敗し、教育の学は到る処に講ぜられて、教育の実は拳らず、天才を呼ぶの声は徒らに高くして、平凡なる教育、没趣味なる社会は却て天才の流れを防遏して已むことなし。吾国の教育界は実に斯の如きのみ。而して一切の善悪*

説を排して、貴族的威権説を立し、人生の目的は、畢竟天才の養成にあるのみと、説くものは則ちニーチェに非ずや。嗚呼かゝる世に向て、かゝる説を論ぜんとする吾等は、これぞもへ何等の迂拙児ぞ。(前掲書、1-2頁)

登張の見るところによれば、当時の日本教育界はいわば机上の空論が飛び交うばかりで、実態が伴っていなかった。とりわけ登張が問題視していたのは、天才の出現を阻むような平凡主義教育や没趣味社会である。このとき登張が着目したのが、人生の目的として天才の養成を掲げるニーチェの貴族主義的思想であった。時代に迎合するのではなく、ニーチェのような反時代的姿勢を登張は貫こうとしたのである。

こうして登張は、ニーチェの教育論とも称される『反時代的考察』を詳述していく。たとえばニーチェの「教育者」観について登張は次のように述べる。「ニーチェ夙に思へらく、大なる人物は、時代の児にあらずして、時代の継児なり。かるが故に、大なる教育家は、また時代の精神に反抗して、少年を教育する者ならざる可らずと。」(前掲書、9頁)——時代精神に反抗しつつ青少年に教育的影響を与えることが「教育者」の条件にほかならない。こうしてニーチェは、ルソー、ゲーテ、ショーペンハウアーの3人を「大なる教育家」と捉えたわけだが、登張にとっては、まさに反時代的思想家たるニーチェその人が自らの「教育者」であったに違いない。だからこそ、迂拙児の謗りを免れ得ないような時代状況の中で、登張は敢えてニーチェ論を執筆したのである。

また、教育や文明の目的に関しては、「国民は、数人の英雄を生ぜむが為に自然の求めたる迂路のみ」(前掲書、10頁)というニーチェの見解を踏まえつつ、次のように述べる。「文明の目的は、偉人の生存を奨励するに在り。之を外にして、文明の目的あることなしと、然らば、いかなる社会か、最も文明に遠かれる。答へて曰く、社会の人々を挙つて偉人天才の発達を障碍し、或は天才をして生るゝこと能はざらしめ、或は天才に向て頑迷なる迫害を加ふる如き社会を云ふ。かゝる状態は純乎たる野蛮よりも文明を去ること遠しと。」(同上)

登張の見るところによれば、ニーチェの教育観は偉人の輩出を望む一種の差別的な天才主義であるが、この教育観に対しても登張は大いに共鳴する。「此の如き大胆なる議論を吐ける、ニーチェ氏は、実にかゝる文明の大立物なりき。氏は先づ自から独立せり、而して後ち他人の為に独立の福音を伝へ、以て自由精神の大なる恩主となれるは猶ほ、シヨオペンハウエルの氏に於けるが如し。氏の偉大なる所は実に茲に存す。」(前掲書、11頁)——数人の英雄や偉人のための教育を重視するニーチェの教育観は、国民教育が重視される時代にあつてはたしかに大胆な主張であるが、時代に迎合することなく自由精神を発揮するその姿勢は「大立物」そのも

のであるとして、登張はニーチェを「偉大」と評価する。

『帝国文学』第7巻第7号に掲載された第2論文でも『反時代的考察』の紹介が続く。第2論文のテーマは歴史論であった。その冒頭で登張はこう述べる。「ニイチエの歴史論は、その文明論に次で最も痛快なるものなり。その論の主旨は、歴史を難じ、歴史家を難じ、歴史的教育を難じ、史的学風を難ずるにあり。読者先づ心を平らかにして、氏の言ふところを聞け。」(登張 1901c、8頁)——登張はここでも『反時代的考察』を「痛快」と評価し、ニーチェの発言に耳を傾けるよう読者に要求するとともに、ニーチェが日本に生き還ることを切望する。「嗚呼ニイチエ氏にして、再び日本に生るゝことあらば、かの自称大歴史家諸君は、何の辞を以て氏に對せむとするか。吾が学界は、猶ほ忍んで、ニイチエの言に聴かざるべからざる也。」(前掲書、15頁)

後期著作に見られる有名な「超人」や「権力意志」ではなく、初期著作の『反時代的考察』に基づき、登張はニーチェの教育論を丁寧に読み取っていると言えるだろう。タイトルや問題設定に明確な言及はないが、登張のこの一連のニーチェ論は、日本で最初の教育学的ニーチェ論と呼べるかもしれない。

### (3) 登張の教育論

実際、登張は教育界にも関心を寄せていた。2本目のニーチェ論が掲載された『帝国文学』第7巻第7号に登張は無署名で「視学官諸君に寄す」と題した雑報を載せ、次のように述べている。「吾が敬愛なる視学官諸君。余は諸君の知らるゝ如く、教育の事に関しては、全く門外漢たるものゝ一人なり。而かも猶ほ自から揣からず、諸君に対して一言なきを得ざる所以は、現今の教育界の状態に就て頗る慚焉たるものあればなり。」(登張 1901d、116頁)

自ら門外漢であることを自覚しつつ、登張は教育界の現状に対して黙っているわけにはいかなかったという。では、登張が見た現状はどのようなものだったのだろうか。

軌近吾国の教育の進歩は、実に疑ふ可からざるの事実なり。独逸にヘルバルトあれば、吾国にも亦ヘルバルトあり。彼国にウイルマンあれば、吾国にも亦ウイルマンあり。彼に社会教育学あれば、我にも亦社会教育学あり。彼にパウルゼンあれば、我にも亦パウルゼンあり。教育学や、心理学や、倫理学や、児童心理や、何れも駸々として底止する所を知らず。之を修むる学者は、無慮数百を以て数ふべく、之に関する著書は、汗牛充棟音ならざるなり。豈に盛ならずや。(前掲書、116-117頁)

このように、西欧の教育学者に多くを依存している点は認めつつも、登張は決して当時の教育学の現状を全否定していたわけではない。むしろ、教育学をはじめ、心理学や倫理学など関連諸科学の理論を紹介する書籍が多数公刊されている出版事情については歓迎の意を表している。ただ、登張の見るところによれば、こうした教育学の隆盛は日本の教育界ないし社会全体が抱える問題の解決には繋がっていないという。

「教育学の普及や洵に善し。されど教育は単に多方興味、五段教授法等を以て、解釈せらるべきものに非ず。倫理学の講習会や洵に慶すべし。されど人は到底善悪の規矩準繩のみを以て、律せらるべき者に非るを如何せんや、余は今日の教育界に於て、否な寧ろ社会全体に於て、一大欠陥の存するあるを想ふものなり。一大欠陥とは何ぞや。趣味の墮落是也。」(前掲書、117頁)——登張はこのように述べ、ヘルバルト主義教育学の普及や倫理学の講習会開催によっては解決され得ない大問題として「趣味の墮落」を挙げる。

では、登張が一大欠陥だと指摘する「趣味の墮落」とはいったい何か。「今日の小説雑誌中、最も勢力在るものは、文芸倶楽部といへる雑誌なり。その発売高は、実に十万以上と号す。而してこの雑誌は、趣味の最も墮落せる雑誌なり。諸君は、仮りに諸君の管理せる高等女学校生徒に向て、小説を読むを厳禁せよ、諸君は果して能く之を厳禁し得べきか。趣味の最も墮落せる文芸倶楽部、若くは之に類似せる小説は、彼等生徒の家庭に臆面なく入りつゝあるなり。学校に於て厳禁せられたる小説は、彼等之を自己の家庭に於て発見することを得るなり。是に於てか彼等は猶ほ餓者の食を求むるが如く、之を読むで飽くことを知らざるなり。趣味の高下は彼等の論ずる所に非らず、作品の巧拙は彼等の関する所に非ず。彼等も亦、趣味墮落の人とならずんば已まざるなり。」(前掲書、117-118頁)

「墮落」の具体的内容は不明だが、趣味の墮落した小説雑誌が少年少女に悪影響を与えることを問題視していることは確かであろう。しかし、「小説を読むを禁ずるが如きは、是に於て畢竟無意義たるべき也」(前掲書、118頁)と登張自身が述べるように、読書禁止令の効果は期待できない。では、どうすればよいか。「現今の小学読本の没趣味なるは、諸君も亦了せらるゝ所ならむ。然れども、現今の小学教員にして能く趣味を解するもの、果して幾人かある、之を教ふる人にして、趣味を解せずんば、趣味ある読本、はた何する者ぞ。」(同上)——つまり登張に言わせるなら、問題解決の糸口は、少年少女に向けて小説読書を禁ずることではなく、彼らの教育を担う学校教員が「趣味」をよく理解することに求めなければならない。このような観点から、登張は視学官に対して次のように提案する。

「視学官諸君。諸君は教育普及の目的を以て、年々盛に講習会を開きつゝあり。こは諸君の為に、地方の為に、洵に慶すべき一事なり。然れども諸君。余は未だ嘗て不幸にして、文芸の

講習会の、諸君の地方に開かれたるを聞かざるなり。これそも——何の故ぞ。趣味の墮落は、文芸趣味を解せざるに基するは、吾等の解説するを俟たざるところ、而して未来の国民をして趣味ある国民たらしめ、文芸を解するの国民たらしめむと欲せば、現今の小学教員をして趣味を解し、文芸を翫賞するの人たらしめざる可からざることも、亦明かなる事実<sup>ニ</sup>に非ずや。」(前掲書、118-119頁)——登張は、趣味墮落の問題を解決する第一段階として、小学校教員に文芸趣味を理解させるための講習会開催を強く要望するのである。

また、登張によれば、趣味墮落の問題と並んで教育界の通弊を生み出している要因として平凡主義を挙げることができるという。興味深いのは、登張がこの文脈でニーチェを「独逸の一快男児」として紹介していることである。

余は以上吾国の便利主義平凡主義に就て一言をなせり、而かも吾国の教育主義も、亦かゝる平凡主義に傾きつゝあるを見ずや。余は茲に諸君に向て、独逸の一快男児を紹介せざる可<sup>ク</sup>能はず、之を誰とかなす、独逸近代の大文章家フレイドリヒニイチェエ<sup>ニ</sup>なり。氏の学説の如何は、今之を詳述するの違なし。唯氏の根本主義を一言すれば、足る。氏は以為らく「人類の目的、世界の目的は、天才の養成にあり」と。唯是のみ。嗚呼その言の何ぞ短かくして、その意の何ぞ深長なるや。諸君。余は我国現今の教育主義を以て平凡主義となせり。諸君は果して能く之を否定するの事実を有すべきか。小学校の教育と、中学の教育と、高等学校の教育たるを問はず、今日の学風は中以下の生徒を標準として教育しつゝあるなり。試験の点数は生徒をして之を視せしめず、甚しきに至ては僅かにいろは順を以て席次を表するのみ、平凡主義に非ずして何ぞや。教師の鼓舞心は廢たれ、生徒の競争心は失はる、活気なく、元気なく、趣味なく、自由なきは、今の教育界の通弊なり。かゝる学風の下に、天才の輩出を望む、また難いかな。(前掲書、120頁)

このように、登張は日本の教育界に蔓延する平凡主義を打開するべく、「人類の目的、世界の目的は、天才の養成にあり」とするニーチェの根本主義に着目した。つまり、ニーチェ論「フレイドリヒ、ニイチェを論ず」においてはその教育観を論じ、教育論「視学官諸君に寄す」においてはニーチェ思想の意義を強調しているのである。この時期の登張において「ニーチェ」と「教育」はいわば密接不可分の関係にあったと言えよう。美的生活論争がはじまるのはこの1か月後のことである。

## 2. 美的生活論争と登張竹風

### (1) ニーチェ論の連載中断

美的生活論争の火種は言うまでもなく、1901年8月5日刊行の『太陽』第7巻第9号に収録された高山樗牛の論文「美的生活を論ず」である。「人生の至楽は畢竟性欲の満足に存する」(高山 1901b、34-35頁)と断言する高山のこの論文に対しては周囲から批判の風が勢いよく吹き込み、火種は瞬く間に大きな炎となった。なかでも、早稲田派に属する長谷川天溪が1901年8月19日と26日の読売新聞に「美的生活とは何ぞや」と題する一文を発表し、高山の端的な本能満足論を論駁したインパクトは大きかった。なぜなら、長谷川のこの論駁は結果として、早稲田派の重鎮たる坪内逍遙による戯作調ニーチェ批判「馬骨人言」の呼び水となったからである。

長谷川天溪の「美的生活とは何ぞや」が美的生活論争の始まりであるとすれば、その美的生活論争をニーチェ色に染めたのは登張竹風であった。先述したように、高山の「美的生活を論ず」は1901年8月5日に『太陽』誌上で発表された。その5日後、1901年8月10日付で連載3本目となる登張のニーチェ論「フリードリヒ、ニイェを論ず(承前)」が『帝国文学』第7巻第8号に掲載される。その冒頭で登張はニーチェの道德論を「極端なる個人主義」と特徴づけ、「自由の本能と威力の意志とを標榜して、猶太的基督教的道德に反抗し、禁欲と同情とを打撃するところ、最も痛快なるを覚ゆ」(登張 1901e、13頁)と評価しているが、これはおそらく高山の「美的生活を論ず」が発表される前に執筆されたものであろう。

1901年8月5日に発表された高山の「美的生活を論ず」を目の当たりにした登張は、『帝国文学』第7巻の第6号、7号、8号と続けていたニーチェ論の連載を一時中断し、急遽1901年9月10日刊行の同誌面上に「美的生活論とニイチェ」を掲載することとなる。この中で登張は「高山君の「美的生活論」は、明かにニイチェの説にその根拠を有す」(登張 1901f、121頁)と断言し、「さればニイチェが学説の一斑に通ずるものに非ずんば、到底その本意を解し難し」(同上)と述べる。つまり、ニーチェ思想を知らなければ高山の意図も到底理解できないというのである。その上で登張は長谷川天溪の「美的生活とは何ぞや」を名指しし、「読売新聞の長谷川天溪君が、「美的生活論」に対する批評は、要するに高山君のニイチェの説に私淑する所あるを知らざりしが為に、起れる幾多の誤解あるが如し」(前掲書、122頁)と批判する。

登張によれば、ニーチェと高山はともに思想家や哲学者というよりも詩人のようなスタンスで世の中を憂慮し、個々人の本能を重視している点に類似性が認められる<sup>註4</sup>。こうして登張は、「高山君の美的生活論を解せむと思はむ者は、またニイチェの個人主義を解せざるべからず」(前掲書、123頁)と断言し、ニーチェ思想に裏打ちされた美的生活論に対して全面的な賛



同の意を表明するのである。「吾等は「美的生活論」を読み、徹頭徹尾賛同の意を表するものなり。今日の世は実に科学万能の世なり、智識全権の世なり、倫理教育全盛の時代なり、而して人間固有の本能殊に自由なる本能を蔑視する時代なり。かゝる世に向て「美的生活論」を標榜し、大に人性本能の発達満足を説く。豈に偉ならずや。」(前掲書、122頁)

もともとニーチェのニの字も出てこない高山の「美的生活を論ず」と長谷川の「美的生活とは何ぞや」から始まった美的生活論争は、このようにしてニーチェ論争へとシフトすることになったのである。

登張に名指して批判された長谷川は、1901年9月23日発行の『太平洋』に「無用の弁(帝国文学記者に物申す)」と題する一文を寄せた(※なお本稿では1905年刊『文芸観』所収版を参照)。「高山樗牛君が太陽誌上に物された『美的生活を論ず』と言ふに対して、吾輩が及ばずながら二三の質問を申上て、且つ自分の立場を明かにして高山君の教を受けやうと思つて居つた所が、豈計らむや、『帝国文学』記者は、高山君の御答もない中に、説明の労をとられた。洵に御親切の段は幾重にも御礼申上げる。然し御教示に対して、少く腑に落ちぬ箇所があつた。」(長谷川 1905、351-352頁)

長谷川はこのように述べ、頼まれもしないのに横から口を出す登張のいささかお節介な論文を「無用の弁」と嘲弄した。長谷川に言わせれば、「高山君が、ニーチェの哲学を採用して、あの一大論文を草されたのか、否かは、吾輩の知らぬ所である」(前掲書、352頁)というのである。こうして長谷川は、登張を「ニーチェ教徒と見做して」(前掲書、355頁)、「ニーチェは、日本内に於いて、いかばかり証典として尊敬されて居るのである乎」(前掲書、353頁)とか、「ニーチェには、何程の真理があるか」(前掲書、354頁)などと、ニーチェに関する質問を投げかけた。

これに対し、登張は1901年10月10日、『帝国文学』第7巻第10号に「<sup>かいとう</sup>解嘲」と題する弁明文を掲載し、長谷川による嘲弄に対して反論を試みる。「天溪は自らはニイチエを知らずといふ。ニイチエを知らざる天溪が、樗牛の文を読み、一もニイチエに想ひ至らざりしは、余之を諒とせむ、然れども、こは果して博識なる天溪の誇るに足るべきことなるか。」(登張 1901g、100頁)——登張はこのように述べつつ、「樗牛が「文明批評家としての文学者」以後の文芸評論を読める者は、必ずやその言論の著しくニイチエ的なるを首肯すべし」(同上)と主張する。

余は、幸か不幸か、聊か「未だ吾国の証典たらざる」ニイチエの書を読める者なり。偶々高山樗牛の美的生活論を読み、その著るしくニイチエの説に基く所あるを知り、而して世間の評家等が毫もかゝる点に関して言ふ所なく、或は樗牛の文を以て哲学者の言論とな

し、或は心理学上の質疑を提出せるを見て、片腹痛きを覚えたるが故に、乃ち秃筆を呵してニイチエの説を掲げ、本能説、悪心説、威力意志説を加へて、「美的生活論」に配し、更にわが言を明かならしめむがために、余が立論は美的生活論に対する評家の言をいかに解釈し得べきかを説きぬ。(前掲書、101頁)

1901年1月に高山樗牛が発表したニーチェ論「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」の存在から、高山がニーチェに私淑していることは明白であり、美的生活論とニーチェ思想との親和性も容易に想像できるはずである。ところが、誰もそのことには触れず、的外れな哲学的・心理学的視点でもって高山の美的生活論を批評している。登張はこうした現状を打開すべく「美的生活論とニイチエ」を執筆したわけだが、登張に言わせれば、これは高山の「美的生活を論ず」を正しく理解するために必要不可欠の解説であって、決して無用なものではない。こうして登張は長谷川を次のように批判するのである。「余が説の誤謬ありや否やは、ニイチエを知れる人の解説を待て始めて明なるべし。されど、無用の弁なりと罵らるべき所以あることなし。天溪はニイチエを知らずと公言せる人なり。ニイチエを知らざる人に向て、ニイチエを説く、これ豈に最も有用なる弁にあらずや。」(前掲書、102頁)

これに対して長谷川は1901年10月、「ニーチェ主義と美的生活」を『読売新聞』紙上に発表し（※本稿では1905年刊『文芸観』所収版を参照）、次のように反撃した。「曾て高山博士の美的生活論に対して、をこがましくも質問を設けた所が、『帝国文学』記者は、傍から高山君の御説を、ニーチェ哲学の上に立つて、弁護された。因て吾輩も其時同誌記者に向つて、『太平洋』誌上に僅かな答弁を試みた所が、記者は近刊の誌上で、再び予に向つて、批評を下された。洵に文字の使ひ方も知らず、語調も弁へぬ拙者の事とて、お気に触つた箇所もあるらしく見受け申したが若し果して有りとすれば、其段は幾重にもお詫を申ませう。然しながら学理の上では、未だ腑に落ちぬ箇所が御座るに依つて、改めて御説明を願ひたい。」(長谷川 1905、356頁)

長谷川に言わせれば、ニーチェ思想と美的生活論に親和性は認められないのであり、したがってまた登張の反論こそ的外れな主張だということよりもむしろ、両者の言い分や反論が噛み合っていないという点であろう。「天溪は余が文を以て無用の弁となせり。然れども余は未だその然るべき所以を解する能はざるなり。」(登張 1901g、102頁)——このように登張が言えば、長谷川も「先づ第一に申上げたいは、記者は予輩の希望した事に就いては、何等の説明をも下されなかつた事が、甚だ遺憾である」(長谷川 1905、356頁)と述べるといった具合で、両者の主張は完全にすれ違ってしまっている。

登張の見立てでは、ニーチェ思想は「美的生活を論ず」の真意を理解するために有用な指標となるはずだったが、肝心のニーチェ思想が当時は未知数であったため、かえって論点が複雑かつ曖昧になり、登張の意図とは裏腹に、美的生活論争をニーチェ論争という名の混沌と喧噪へと導いてしまったのである。

## (2) 再開されたニーチェ論の変化：美的生活論争の最中のニーチェ論

すでに見たように、登張は『帝国文学』第7巻の第6号、7号、8号と続けていたニーチェ論の連載を一時中断し、第9号に「美的生活論とニイチエ」を、第10号では長谷川天溪と後藤宙外に対する反駁論文「解嘲」を掲載した。このように、美的生活論争がはじまってまもなくは連載が途絶えていたわけだが、第11号ではニーチェ論の最終回が掲載される運びとなった。ただ、このニーチェ論はこれまでとは様相を異にするものであった。

『帝国文学』第7巻第8号に引き続き、第11号掲載の「フリードリヒ、ニイチエを論ず」の主要テーマは「道德論」であった。その冒頭には次のようにある。「ニイチエの道德論と相連関して、茲に詳述せらるべきは、実に氏の超人論なりとす。然れども、超人論はまたその転生論若くは輪廻説に基くものなるが故に、余は先づ氏の輪廻説を述ぶべし。」(登張 1901h, 23頁)——こうして登張は、永劫回帰や超人といったニーチェの根本思想を読み解いていく。ここまでは従来のニーチェ論と変わらない内容とトーンである。

しかし、登張は「道德論」の後に「余論」を用意し、「更にニイチエ思想の内容について言はむか」(前掲書、31頁)と述べてニーチェ思想の意義を強調する。また「更におもしろきは、ニイチエの人物なり」(前掲書、33頁)と言い、矛盾に満ちた謎多き人物としてニーチェを描くことによってその魅力を最大限に引き出そうとする。「氏は徹頭徹尾、最も異彩を帯べる快男児なり。氏は最も矛盾に充てる人物の一人なり。氏の人物を解するは、決して容易の業にあらず。唯々一切の天才は矛盾に充てるを記せよ。」(前掲書、33-34頁)——登張の見るところによれば、ニーチェの思想が異彩を放ち矛盾に満ちているのは天才の証にほかならないのである。

こうして登張はニーチェ思想のアクチュアリティを強調しようとするが、彼にとって追い風となったのは、日本におけるニーチェ主義の流行であった。「読者諸君は更に眼を転じて、吾国に於けるニイチエ伝播のいかに速かなるかを看取せよ。吾文壇が始めてニイチエの声を聞きしは、実に一兩年以前にあらずや。而してその思想主義等を説けるは、実に今年に始まる。独逸に於けるニイチエは、その流行児となるに至るまでは、最も速かなりと称せられながら、猶ほ二十年を俟たざるを得ざりしに、吾国に於けるニイチエは期年ならずして、今やあらゆる文学雑誌及諸新聞の喋々する所となりぬ。甚しきに至ては、ニイチエが全集十一巻の思想学説を

ば、一週間の短時日を以て、直ちに悟了せる大文学者、大哲学者、大超人さへ出るに至りぬ。豈にまた盛ならずや。」(前掲書、34頁)

このように、登張はまず、本国のドイツを凌ぐ勢いでニーチェ思想が影響力を増している事実を指摘する。そのうえで登張は当時の世界情勢に言及し、自国の領土拡大を企図して侵略戦争を繰り返す近代国家の真相を理解したければニーチェの著作を読むべきであると力説する。「余は天下の青年諸君に告ぐ、基督教の仮面を蒙りて、人道を蔑視し、同胞を虐待し、他人の国土を侵略し、婦女を凌辱するが如きは、これ実に現代の国家競争の真相にあらずや。国家の前には、愛他心なし、人道なし、宗教なし、道徳なし。そのこれあるが如きは、唯仮面のみ、皮相のみ。国家的個人主義は、二十世紀の世界舞台に演ずべき大戯曲にあらずや。この真相を知らむと欲せむものは請ふニイチエを読め。」(前掲書、35頁)

また、「視学官諸君に寄す」と同様、日本の教育界に蔓延する平凡主義を問題視しつつ、そのアンチテーゼとして天才の輩出を企図するニーチェの個人主義に着目し、やはりここでもニーチェ読書を強く推奨する。

吾国の教育の現状今果して如何。一切の競争心を無視し、一切の鼓舞的教育を排し児童を以て傀儡と同一視し、天才あれども、之を助長せしむるの方策あるを知らず徒らに児童心理学者等を以て天才の児を解剖せしむるが如きは、今の教育界の惨状に非ずや。更に彼の教育者の如何を觀よ日本唯一の大教育家の団隊たる帝国教育会は陳腐平凡なる教育雑誌の発刊と夏季講習会を開くとの外、及び時々、文部省の政策に向て猜疑的狐狸的妨礙を加ふるの外、何等の見るべき功績ありや、青年諸君よ諸君の時代は実に個人主義の時代にあらずや。諸君にして若し区々たる世間の事業に関与し、或は慈善と称へ、或は社会のためといひ老衰者若くは婦女子のなすが如き事業を営むことあらば、是れ既に諸君なきなり。個人主義及天才論を以て危険なりとなすもの、如きは、自から天才ならず、自から個人的権能なきが為に強いて諸君を厭抑せむとする愚昧の大痴漢のみ諸君若し個人の才能を欲し自から天才たらむを冀はば、請ふニイチエを読め。(前掲書、36頁)

ニーチェ思想の教育学的意義を主張するという基本スタンスは従来の「フリードリヒ、ニーチェを論ず」や「視学官諸君に寄す」と変わらないが、天才を目指す青少年に向かって「請ふニイチエを読め」と直訴する手法はこれがはじめてである。また、「余はまた終りに臨んで、ニイチエを罵り、ニイチエを駁し、ニイチエを笑へる諸君に向て、諸君の駁議あるがため、諸君の罵詈あるがため、諸君の嘲笑あるがためにニイチエが主義思想の愈々益々吾国に伝はれる

の迅速なるに至れりしを多謝す」(前掲書、37頁)とも述べ、敵陣を挑発するような捨て台詞を吐いている。もともとは純粋なニーチェ論として連載されていた「フリードリヒ、ニイチェを論ず」であるが、美的生活論争に巻き込まれる中で学術論文としての使命を見失い、青少年を煽動するとともに敵陣をも挑発するような文章となってしまったのである。

### 3. 登張竹風と坪内逍遙の直接対決

#### (1) 登張の「馬骨人言を難ず」

長谷川天溪に対する登張の弁明文「解嘲」が発表された2日後の1901年10月12日から11月7日までの約1ヶ月間、坪内逍遙は『読売新聞』紙上に「馬骨人言」と題する戯作調のニーチェ批判を連載する。坪内逍遙と言えば、『小説神髓』や『当世書生気質』の著者として知られる小説家であるが、じつは彼こそ長谷川天溪が属した早稲田派の御大将であった。匿名ながら当代きってのカリスマたる坪内が『読売新聞』を舞台に繰り広げた容赦のないニーチェ批判は、ニーチェ思想やニーチェ主義者に対する大きな逆風を巻き起こすことになるが、登張はこの向かい風の中、敢然と敵陣に立ち向かう。

坪内に対する最初の反駁は、1901年12月10日発行の『帝国文学』第7巻第12号に掲載された「馬骨人言を難ず」であった。その冒頭は次のような書き出しである。「馬骨人言は、「バコツジンゲン」と読むべからずして、「ウマノホ子、ヒトノゴトク、モノイフ」と訓ずべきものなりとぞ。こは読者の既に知悉せらるゝ如く、十月十二日より十一月七日に続き、読売新聞紙上に連載せられたるニイチェ論なり。余は未だその著者の何人なるかを詳かにせず、然れども筆路暢達、滔々数万言をつらねて、毫も倦色なき健腕に至ては、何人も先づ指を当今文壇知名の士に屈するなるべし。」(登張 1901i、106頁)——ここでは著者不詳と述べているが、「何人も先づ指を当今文壇知名の士に屈するなるべし」と登張も述べているように、実際のところ「馬骨人言」が坪内の手になることは半ば公然の秘密であった<sup>註5</sup>。

登張はこう続ける。「馬骨人言の著者は、己れを以て何処の馬の骨やら知れぬやつが、人の如くもの言ふものと、なせとも、余の見<sup>ママ</sup>る所を以てせば、著者の真意は蓋し別に存するが如し。著者は始めより、著者が攻撃批難の対境たるニイチェその人を以て、馬骨同様に軽侮し、己れを持すること極めて高く、ニイチェが浩瀚なる大著述を以て、全く有害無益の悪文字となし、所謂馬の骨人の如くもの言ふもの、となせるに似たり。」(前掲書、106-107頁)——登張の言うように、これは坪内の謙遜ではなく、どこの馬の骨とも知れぬニーチェが生意気にも一丁前の人間のように物申していることへの当て擦りであった。こうして登張は、ニーチェの著作を

有害無益の悪文字とする坪内に対し、「余は未だ嘗て、馬骨人言の如く嘲罵の悪文字を羅列したるを見ざるなり」（前掲書、107頁）と批判する。

登張にとってもっとも許しがたかったのは、坪内らニーチェ批判者がドイツ語を読めず、したがってまたニーチェの思想を、高山の美的生活論というフィルターを通して臆気ながら浮かび上がる個人主義的本能論と単純に理解し、ニーチェの諸著作が無意味であると痛罵している点であった。「馬骨人言の著者は、自から独逸語を知らずといへり。独逸語を知らざる人の、今日、ニイチエに関していかばかりの評論をかなし得べき。余を以て漫に独逸通を振り廻す者となすなかれ「ザラトフストラ」一篇の翻訳を以て、ニイチエを知らむとするは、人の足を撫して、その容貌を知らむとするよりも、愚なるを如何せんや。しかも、余は「ザラトフストラ」一篇さへ、果して著者が精読の榮を得たるや、否やを疑はざるを得ず。高山君も既に評せる如く、ニイチエが個人主義本能論等の真相は、その転生論、超人説を知らずしては、到底解すべからず。さるをニイチエがかゝる宗教的、詩歌的空想に就ては、一言もいふところなく、直ちにその個人主義を以て我欲一辺の大悪論となし、ニイチエは何の必要ありてか、その著を公にしたるとまで、痛罵す。滑稽も亦極れりと謂ふべし。」（前掲書、111-112頁）

こうして登張は「実に馬骨人言あるかために憤激せり」（前掲書、115頁）と怒りを露わにしつつ、「この憤激の念は、余を驅て詳細なるニイチエの評伝と、「ザラトフストラ」の翻訳とに従事せしめたり」（同上）と述べ、「余は遠からず、之を剗腕に附して、世に問ふべし」（同上）と宣言する。その上で登張は、坪内や長谷川らに追隨するニーチェ批判者に対して「馬骨人言の如き浅薄羸弱なる御大将の下に随喜するは決して公等の榮譽にあらざるなり」（同上）と論じ、「先づ心を平らかにして、ニイチエの研鑽を積ね、而して後ち捲土重来の勢を以て、ニイチエの壘に迫り来れ」（同上）として、偏見や先入観を捨ててニーチェ読書をするよう訴えかけるのである。

## （2）坪内の「帝国文学記者に与へて再びニイチエを論ずるの書」

一回り以上も年齢の若い登張からの批判を受け、坪内は1901年12月18日から3日間『読売新聞』に「帝国文学記者に与へて再びニイチエを論ずるの書」を連載した（※なお本稿では1903年に富山房から刊行された『通俗倫理談』収録版を参照）。

その冒頭で坪内はこう述べる。「竹風君、『帝国文学』第十二【引用者註：「馬骨人言を難ず」】を手にすることを得て君が弁駁の文を読みぬ。予は君が弁駁の態度の、彼の顧て他を言ふ輩の所為に似ずして、流石に其の師ニイチエが唯一の善美処たる真摯と正直とを体踐せられたるが如き概あるを悦ぶ。又君がニイチエヤニズムの鼓吹が、一事の客気私情に出でずして寧ろ学風

の刷新を企図せんとするに在りし由を諒とするを得て、君と其の師と、ニイチェヤニズムの最醜悪処に於て相背馳せるが如き趣あるを悦ぶ。」(坪内 1903、467-468頁)——何よりも目を引くのは「竹風君」という上から目線の呼びかけであろう。ここには42歳と28歳という圧倒的な年の差があった。

坪内はまず「馬骨人言」に憤慨して君はニイチェの評伝と『サラツストラ』の翻訳に従事すとや(前掲書、468頁)と述べ、「予は君が企を賛成す」(同上)と一定の評価を示す。ただ、坪内はこう続ける。「併しながら君が「馬骨人言」に対する此のたびの弁駁は悉皆正鵠を外れたり」(同上)。こうして坪内は登張の「馬骨人言を難ず」に対して反撃を開始する。

はじめはニイチェヤニズム及び其の軽佻なる推奨をば寧ろ人道の軽薄なる敵として賤みたり。やがて其の喧伝せられ、推尊せらるゝを見聞するに及んでは、我が国民の<sup>プライド</sup>矜持を侮蔑せられたるが如く感じて憤り、其の倫理見の恰も予が平生の倫理見と直反対なるを覚りては、さらぬだに混乱せる我が徳育界の一の妨礙と做して憤激せり。文致の皮相にのみ拘泥して予が志の真摯なるを疑ふ勿れ。ニイチェヤニズムにして為我一辺主義の替名ならんか、予が彼れと不俱戴天を盟へること決して今日にはじまれるにあらざるなり。予不肖なれど事に教育に従ふこと十八年、中に就いて幼弱の訓育に関係せる此の五年間は、聊か倫理研究に心を傾け、かくて定め得たる徳育の立脚地は、奇怪にもニイチェが意見と其の形式に於ては著く相類似し若しくは殆ど吻合し、而も其の内容に於ては殆ど全く相背けり。(前掲書、470頁)

坪内の言うところによれば、最初はニーチェ思想そのものやニーチェ主義の流行に立腹していたが、ニーチェ主義が蔓延するに及んで次第に日本国民としてのプライドを傷つけられたような気持ちになり、最終的には道德教育上の使命感から、「馬骨人言」を執筆する決意をしたという。

ここで想起したいのは、坪内が教職従事者であったという事実である。実際、坪内は1896年から1903年にかけて早稲田中学の教頭・校長を歴任し、「方今の小中学徳育及び其の弊」(1898年4月)や「現行諸倫理教育方案の根本的誤謬」(1899年3月)を『早稲田文学』誌上に発表するなど、とりわけ道德教育に強い関心を抱いていた。こうして坪内は「馬骨人言」執筆の動機をこう明かすのである。「彼れ【引用者註：ニーチェ】が放僻の説は、明かに徳育界全軀の障礙なり、其の説單純粗鹵にして俚耳に入り易きが故に危険なり。悪時代精神の権化なるが故に危険なり。是れ予の「馬骨人言」を草するに至りし主因なり。」(前掲書、472頁)<sup>註6</sup>

端的に言って、ニーチェは道德教育界の敵にほかならなかった。坪内によれば、「ニーチェは羅馬滅亡以来の最悪語家にして、而も無責任、不学証の悪語家なりしなり」（前掲書、476-477頁）と言わざるを得ない。それでも、分別のある大人であればニーチェ思想の誤謬や危険性は察知可能かもしれない。「然るに無思慮、無分別、無見識の幼弱の目に映ずるニーチェヤニズムに至りては純然たる無道德主義、絶対の利己主義也。義務を無視し、良心を無視し、不自制を奨励し、忠恕惻隱を排斥し、礼儀を破り、師父を侮ることを鼓吹す。是れ豈教育の賊ならずや。幼弱は当来の元気なり、其の元気を腐蝕するもの之れを社会のバチルスとせずして何物をか社会のバチルスとせん、苟も徳育に従事せんもの、之れと戦はずして何者と戦はん。」（前掲書、475-476頁）——ここには倫理教育に携わる教育者としてのプライドがはっきりと表明されていると言えよう。坪内はニーチェ思想とその思想を鼓吹するニーチェ主義者をまとめて「教育の賊」や「社会のバチルス」と辛辣に批判し、ニーチェ主義を有害認定するのである。

こうして坪内は「我が思想界、徳育界との関係上より見たるニーチェヤニズムの価値」を問い、「此の点もまた君等鼓吹者が弁明の責任を有すること多大なりとす」（前掲書、478頁）とした上で、登張に対して「彼れの説は有益なりや、有害なりや」（同上）と二者択一を迫るとともに、こう詰め寄るのである。「ニーチェと同意見の廉々だけを簡に箇条書にして『帝国文学』の紙上に示せ。こは君が著訳以前に於て必要なり、単に予に対してのみならず、広く社会に対して君が必要の義務たるべし。」（前掲書、480頁）

また、ニーチェ思想の教育学的意義をほのめかしている点については、こう詰問する。「ニーチェが思想はよし時代精神に過ぎずとも之れを道破せるが故に偉なりとや。所謂時代精神とは何ぞ。文明の弊を罵るの声か。形式教育の排斥か。煩瑣研究の非難か。没趣味教育の痛罵か。かゝる思想の傾向を君は真面目に創新なりと言ふや。ルーソー、ペスタロッチの説は如何。エルテリズムの一面に此の傾向見えざりしか。ローマンチズムの思潮は如何。マシュー、アーノルドの教育主義は如何。」（前掲書、489頁）——教育界のクラシカーたるルソーやペスタロッチらとの異同を問うことによって、坪内はニーチェの非教育学性を際立たせようとするのである。

教職にも従事し人生経験も豊富な坪内に言わせれば、登張は教育に関する知識も人生経験も乏しい。にもかかわらず、根拠なき自己有用感でもって差別主義的天才崇拜を唱えることは、少なくとも坪内にとっては恥ずべき行為でしかなかった。こうして坪内は登張の若気の至りを次のように揶揄するのである。「君は匿名の為の故に予の勇気を疑ひたりしが、予は寧ろ君の勇に富めるに驚く。幼弱教育の知識、経験、手心いまだ豊かならずして大胆なる教育案を推奨するの勇に驚く、是れ一つ。人情にも、世故にも、心理にも、倫理にも精通せずして、人間の本性を断論し、人道の標準を断論するの勇に驚く、是れ二つ。前と後と、論旨矛盾して動ずる色



なく、剩へ師の本旨とも衝突して異とする色なく、漫然として敵者を罵倒するの勇に驚く、是れ三つ。身教育の責任ある位置にありながら、教育会の席上に於て無定見の青年に対して漠然たる為我主義を唱へ“pocket-courage”をすら鼓吹せられし大胆に驚く、是れ四つ。最後に、某問題の為の故に十有二万の男女老幼が一実業的天才の犠牲となれる刻下に於て、天才の為には千万の凡俗を犠牲にせよと叫破する残忍至極に類する似而非勇氣に驚く。」(前掲書、491-492頁)

### (3) 登張の「馬骨先生に答ふ」

坪内の論駁に対し、登張は1902年2月発行の『帝国文学』第8巻第2号誌上に「馬骨先生に答ふ」を掲載する。「馬骨人言の記者先生足下。余が先生のニイチェ論を駁したる一文は、再び先生を煩はして、懇篤なる高教を添うするを得たり。」(登張 1902b、69頁)——登張は冒頭でこのように述べるが、ここにもやはり両者の年の差がうかがえよう。「余は洵に先生のいはるゝ如く、身未だ自立にだも達せざる年少の黄吻児、幼弱教育の腕前たしかならず、閱歴未だ豊ならず、心理に通せず、倫理に達せざる一青年なり」(前掲書、74頁)という表白もどこまで本心だったかは疑わしいが、少なくとも表面上のポーズとしては年下の登張の側に遜る必要があったのである<sup>註7</sup>。

「今や謹厳熱心を極めたる先生の好文辞は、滔々数千言に渉りて、余がニイチェ論に対する質疑となりぬ」(前掲書、69頁)と登張は述べ、自らのニーチェ観を並べて可能な限り坪内に応答する。たとえば超人について登張はこう述べる。「吾等を以て見れば、ニイチェの転生論、超人説は、実にニイチェ主義の大眼目たり。その個人主義も、善悪価値転倒論も、一に之あるが為に活き、之あるがために理想となり、宗教となり、詩歌となる。」(前掲書、72-73頁)——つまり登張に言わせれば、極端な個人主義として負のイメージが定着してしまっているニーチェ主義も、「超人」という理想像を憧憬する一つの宗教ないし詩歌として理解すべきであり、その意味において「ニイチェの超人説は此に於てか青年思想の代表者となれり」(前掲書、71頁)というのである。また、坪内から寄せられた「吾国に於けるニイチェの価値は如何」という問いに対しては、「独逸に於けるニイチェの価値は、則ち吾国に於けるニイチェの価値なり」(前掲書、73頁)と回答する。

ただ、このような回答が坪内を納得させることはなかった。そのことは何よりも登張自身が感じていたであろう。長谷川天溪との論戦もそうだったように、ニーチェ論争と化した美的生活論争はもはや両陣営の水掛け論でしかなかったからである。少なくとも登張は、ニーチェ思想を危険視する人たちには何を言っても無駄だと感じていたに違いない。しかし、見方を変えれば、そもそもニーチェも含め詩人や小説家への傾倒というのは個人的な「趣味」の問題であ

るから、互いに理解不能であると同時に不可侵のはずではないか。登張はこのようにも考えた。

而して今日の新聞小説及び新体詩等を通覧するも、その能く危険ならざる者果して幾何ありや。先生の如き見地を以てせば、ゲーテも危険なり、ダンテも危険なり、ハイ子も危険なり、シエクスピアもまた危険ならずといふべからず、あらず、あらず、一切の詩人小説家は悉く危険なる思想を伝へむかために、斯土に生れたる厄介物となり了すべし。倫理に精通し、幼児教育の閥歴たしかなる先生の、嘗ては日本唯一の劇詩人と仰かれ玉ひながら、いかなる風の吹き廻しにや、今や、十九世紀末の偉人を捕らへて、危険呼ばりの下に無価値の宣告を与へ、縁日の見世物同様の代物なりなど絶叫さるゝが如きは、これ亦先生の所信として動かすべからずとせば、そは先生の一家言として猶ほ忍ぶべし。然れども、吾等の如き、空想によりて安慰を求め、詩歌によりて慰藉を得、天才偉人によりて人生の価値の甚大なるを知らむとする者の所信を如何せんや。趣味の問題は飽くまで個人的なり。甲の利とするところ、乙必ずしも之を利とせず、丙の危険なりとなすところのもの、丁は却て之を推奨するか如きは、畢竟その事の趣味の問題に帰着するがためにあらずや。余は殆んど先生の問に対して答ふる所以を知らざるなり。(前掲書、73-74頁)

登張に言わせれば、坪内は少なくとも次の二点において批判されるべきであった。第一は、ニーチェ思想を有害と見なす坪内の見解に従う限りゲーテやシェークスピアなどあらゆる詩人・小説家が危険思想と認定されるはずだが、危険視されているのは不当にもニーチェだけであるという点、第二は、そもそも坪内自身が詩人・小説家の側にいたはずなのに、美的生活論争がはじまった途端に今度は倫理教育の観点からニーチェという19世紀末の偉大な詩人・小説家を誹謗中傷する態度の豹変ぶりである<sup>註8</sup>。

こうして登張は、ドイツ語やニーチェ思想に詳しい自らの立場を最大限に生かし、坪内の弱点を攻めようとする。すなわち、ニーチェ思想の解釈そのものについてではなく、あえてニーチェの著作や翻訳に関する事実確認の質問を突きつけることによって、ニーチェ思想に対する坪内の無理解をあばこうとするのである。「茲に於て先生に問ふべき一事あり。先生は曰くニイチエの著書は残りなく翻訳されたるを知らずやと。倫理の道に精通し、幼弱教育に従事せらるゝこと二十年の長きに渉れる先生の身を以て、虚言偽辞を放たれむことは、余の固より夢想だもせざることなれども、ニイチエの書が一切英翻訳せられたりといふが如きは、余の此の文を草する瞬間に至るまで、余の全く知らざるところなり。先生にして若し更に高教を賜ふの期あらば、願くは英訳の題名と翻訳者の氏名とを書して之を示せ。万々一先生の断言にして偽りならむには、これ

実に白書鬼面を被りて人を威嚇せむとするもの、名誉ならざる批判或は先生の頭上に下らむことを恐る。敢て高教を突つ。」(前掲書、76-77頁)

#### 4. 教育界からの追放

##### (1) 登張の依頼免官

1902年12月に高山樗牛が夭逝したことで美的生活論争はやや下火になるが、登張竹風はニーチェ主義の代表者として孤軍奮闘する。たとえば1903年5月に発表された「春興放語」には「**狂者狂を論ず**」という一文が収められているが<sup>註9</sup>、これは『読売新聞』紙上に掲載されたとあるニーチェ批判に対する反批判である。以下にその全文を引用してみよう(※なお本稿では1906年9月刊行の『舌筆録』収録版を参照)。

此間の読売新聞にニイチエ論なるものが出て居りましたね。その中にニイチエは狂人である、日本では此狂人を兎や角云って此狂人の書いた物を輸入して自ら得意がって居る者があるではないかと云ふやうなことが書いてありました。ニイチエが晩年狂人になったと云ふことは明かなる事実で有って、何も今日に成ってことゞしく言ふ必要はない。私共も多少ニイチエの書物は読んだ積りでありますが、斯の如きことは余りに知れ渡ってゐる事実であつて今更ら嗚々するを用ゐない。さうして此論の最も滑稽なことは、ニイチエ全体の著書を以て悉く狂者の書いたものであると云ふ風に書いてあることです。恐れ入った御議論もある者ですね。かゝる人は唯説の新奇を求めて人を驚かすのが能事で、学問界の賊といつてよろしい獅子身中の蟲に過ぎない者だ。又一旦狂人となつた者であるから、その著書は読む勿れといふ意ならば、西郷隆盛は賊であつたから、その言行は一切唾棄すべきであるといふと同筆法で、箸にも棒にもかゝらない痴者とは、かゝる議論をする人々で、まあ狂者です、キ印です、一笑に附する外はない。何も之を今更新聞に書いて大発見をしたるが如く、大読書家であると云ふ顔をするにも当らないことで、是は自己の狂愚を発表するに過ぎない、狂者狂を笑ふとでも誉めて置きましょう。(登張 1906b、352-353頁)

『読売新聞』にニーチェ批判を寄稿した人物が何者かは不明だが、登張は、ニーチェを狂人と見なしてその意義を全否定するような論者こそ「狂者」であると一笑に付す。ニーチェ思想の意義を信じて疑わない登張から見れば、このようなニーチェ批判は到底受け入れがたいものであつたらう。しかし、「此狂人の書いた物を輸入して自ら得意がって居る者がある」という

ような挑発に乗って、「箸にも棒にもかゝらない痴者とは、かゝる議論をする人々で、まあ狂者です、キ印です、一笑に附する外はない」などと返答する登張の態度は、いささか冷静さを欠いていると言わざるを得ない。四方八方から降りかかってくるニーチェ批判を相手取って孤軍奮闘する中で、登張は皮肉にも、まさに坪内が言うような「教育の賊」ないし「社会のバチルス」としての姿を露呈してしまったのである。

事態が大きく動いたのは1906年のことである。「春興放語」も収録された『舌筆録』が1906年9月7日に春陽堂から刊行されたその数日後、登張は勤務先の東京高等師範学校に体調不良で欠勤届を提出する。しかし、その翌日の9月12日、校長の嘉納治五郎から私信で出頭の命を受け、辞職を勧告される。理由は、登張がニーチェ主義者だからであった。このあたりの経緯や理由については、1934年刊行の自伝的著作『人間修行』に掲載された「「ニーチェ」の筆禍事件」に詳しい。

明治三十九年の九月十一日、僕は病気をしてゐて欠勤届を差し出した。と、その翌日、嘉納先生から「急に懇談したいことがあるから学校に出頭せよ」との親展の私信が来た。病軀を押して急遽罷り出ると、「この頃、ある高官が文部省に来て『普通教育の源泉たる高等師範学校に、怪しからぬ言論を唱へる者があるさうぢや、以ての外のことではないか。超人とか何とかいつとるさうぢや。超人などといふ思想は突き詰めてゆくと、全く以て恐懼の至りぢや。左様な人非人を、文部省は何で今まで不問に附してゐるのぢや云々』と、膝詰談判であつたさうだ。君の言論思想がどんなものであるか、自分は検討しようとは思はぬ。が、事ここに至つては君を庇護することは、校長として君の思想を旧聞に属することで、目下は左様な思想は毛頭説いてゐないといふのなら、多少の執り成しも出来ようと思ふ、が、思想はまた格別のものだ。今後も引き続いてそれを唱道したいといふ君の意見なら、それは君の自由だ。ただ、それだともはや已むを得ない、この際即刻辞表を出してくれたまへ。」と諭され、ことの意外に仰天しながらも、恐懼して、兩三日の御猶予を乞ひお許しを得て退出し、直ぐその足で、京都へ行くべく新橋に向つた。京都の恩師谷本梨庵先生をお訪ねして、出処進退を決しようといふ考へであつたからだ。(登張 1934、238-239頁)

以上からも明らかなように、登張は教育界にニーチェの危険思想を持ち込もうとする「教育の賊」と見なされ<sup>註10</sup>、国の教育行政を司る文部省によって教育界から追放されようとしていたのである。

結局その後はどうなったのか。想定外の辞職勧告に動揺した登張は数日の猶予期間をもら

い、京都にいる恩師谷本富を訪ねようとするが、「病後の汽車の旅が、恐ろしく苦しくなつたので、途中静岡に下車して、大東館に一泊しての明けの朝、雪を戴いてゐる富士を眺めてゐるうちに、ふと心機一転し」(前掲書、239頁)、辞職を決意する。「[「かやうなことは、自分一人で即決すべきものだ。大変な誤解を来たしたのは、自分の不明不徳の致すところ、この際潔く辞表を提出して、引責すべきものだ」と腹が極つて、あたふたと帰京し、即日辞表を差し出して、十月に依願免職となつた。](同上)——このように、登張はおとなしく負けを認めるのである。

ただ、興味深いのは、登張が「誤解」を招いたことに対する責任を取っているのであって、ニーチェ思想そのものの意義を否定しているわけではない点である。事実、登張はその後、ニーチェの著作の翻訳にも従事している。高山樗牛もそうだったように、高等師範学校教授の職を辞することで登張は学校教育という枠外に飛び出し、その新たな世界でニーチェとともに生きる道を模索しようとしたのかもしれない。

## (2) 登張を擁護する声

美的生活論争の終盤戦では孤軍奮闘を強いられ<sup>註11</sup>、寛容な態度で接してくれた校長の嘉納治五郎<sup>註12</sup>にも見放された登張は、最終的に四面楚歌のような状態で教育界から追放されてしまうが、そのような登張を擁護する声もあった。高山や登張と同様、ニーチェ主義者を自認する評論家の久津見蕨村／息忠(1860-1925)である。久津見は1907年5月に執筆された評論「文部省とニイチェニズム」の中でこの一件における文部省の対応を批判し、登張を擁護した。ここでは、1911年12月刊行の著作『人生の妙味』<sup>註13</sup>の附録として収録された「文部省とニイチェニズム」を参照しつつ、その中身を確認しておこう<sup>註14</sup>。

久津見はまず冒頭で次のように述べる。「東京諸新聞の伝ふる所にして真ならば、東京高等師範学校の教授登張信一郎(即ち竹風)はニイチェニズムを自己の所信とするを以ての故に、文部省の忌諱に触れ、論旨免官の沙汰を被らんとすと云ふ。思想信仰の自由に対する迫害は古来頗ぶる多かりき。為に生命財産をも奪はれたる学者宗教家少なきに非ず。一教職の免官の如き、必ずしも其甚著なるものに非ずと雖も、而かも亦是れ我国に於ける思想信仰の自由を迫害する所以の一例として見ることを得べし。」(久津見 1911、419頁)——このように、久津見はこの一件を思想信条の自由が迫害された事例と見ている。久津見がとくに問題視したのは、思想信条の自由が憲法に保障された権利であるにもかかわらず、公権力たる文部省がそれを蹂躪している点であった<sup>註15</sup>。

「文部省を以てニイチェニズムを見る。之を蛇蝎視するは文部省彼れ自身にありては誠に其

当然也。今日の文部省が取る所の道徳論は主我主義にあらず。曖昧なる利他学派なり。自由主義に非ず。専制的の嚴肅主義也。随つて興楽主義（エウデモニスム）にあらず。得手勝手なる禁欲主義なり。又国家万能、政府独尊論にして個人零位主義なり。其見る所は全くニーチェの正反対にあり。ニーチェは文部省の敵にして文部省はニーチェの徒の憫笑にだも価ひせざる愚物の団塊に外ならず。其愚物の団塊が其敵たるニーチェの徒を迫害するは彼等にありては正当なるべし。唯彼等は憲法の保障せる思想信仰の自由と云ふは反対論をも寛容するにあることを記憶するを要す。」（前掲書、434-435頁）

久津見もそう述べているように、たしかに文部省の立場からすれば、ことごとく主義主張の異なるニーチェを許せないのは十分に理解できる。しかし、思想信条の自由という憲法で保障された権利を奪うこともまた許されない行為のはずである。こうして久津見は文部省を批判する一方で、理不尽な辞職勧告に対して自ら免職を申し出た登張の潔さを称えた。「聞くが如くんば文部省の干渉に対しては冷笑を以て報ひ、而して自から辞表を出せりとか。竹風の所為や可なり。其稍や超然として俗界紛々の事に関せざらんとする所、流石にニーチェニズムを信ずる徒たるに恥ぢずと云ふべし。」（前掲書、420頁）

久津見は同じニーチェ主義者として登張の態度と行動をこう賞讃したが<sup>註16</sup>、世の中全体としては文部省の辞職勧告を当然と見る向きが多かったようである。「逍遙の激しいニーチェ批判が、『読売新聞』という大商業新聞に一ヶ月近くも面白おかしくほとんど連日掲載されたことは、ニーチェの名を一躍世間一般に浸透させる効果があっただろう。その門下の長谷川天溪や島村抱月の主張もそれを助けたであろう。一方でまた、逍遙らの主張はニーチェを危険思想と見なす輿論を作りあげることにもなった。早稲田派の人々ばかりでなく、帝大出身の論者も逍遙の見解の影響を受けている。それまで美的生活論を批判してもニーチェ主義を真っ向から排撃した者はいなかったが、逍遙が初めてこれを行ったのである。後年、平塚らいてうがニーチェの本をもっていて校長から注意を受けたとか、登張竹風がニーチェ主義喧伝のために官憲に睨まれ、東京高師の職を辞するに至ったことも、逍遙の激しい論調がいわゆる輿論をリードしたことを物語っている。」（杉田 2010、50-51頁）——杉田もこう指摘するように、美的生活論争は反ニーチェ主義を掲げる坪内逍遙の勝利に終わったのである。

ニーチェ思想の教育学的意義を示す可能性を持ち得ながらも、登張は率先して美的生活論争の渦中に飛び込み、青少年をニーチェ主義へと煽動するような言動を繰り返すことで、皮肉にもニーチェ思想の危険性＝非教育性を自ら体现してしまった。そして登張は1910年に第二高等学校教授として現場復帰するまで教育界から追放されるのである<sup>註17</sup>。

## おわりに

これまでの考察の結果、独文学者の登張竹風も、高山と同様、教育学的な観点からニーチェの意義を論じていたことが明らかになったと言えるだろう。高山がニーチェ読書による青少年の自己修養の可能性を主張したのに対して、登張は、平凡主義に墮した日本の教育界を打破する可能性をニーチェの超人思想=差別主義的天才主義に見た。しかし、1906年9月の辞職勧告によって、ニーチェ主義者の登張はいわば教育学的に敗北する<sup>註18</sup>。

では、なぜ登張は敗北したのか。それはやはり美的生活論争に巻き込まれてしまったからであろう。登張は1902年2月の『帝国文学』に掲載された「馬骨先生に答ふ」の中で、美的生活論争に巻き込まれていく様子を次のように描写している。「熟々当文壇の論争を見るに、多くはその初め真面目なる研究を以て起り、再駁三駁の後は遂に漫罵となり、冷嘲と変じ、その甚しきに至りては、野人暴漢も猶ほ敢てせざるが如き人身攻撃に至りて已むを常とす。例を余一身に取りて言ふも、余がニイチェを紹介し、ニイチェを鼓吹してより以来、幾多嘲笑罵言の悪語は頻々として余が頭上に下り来れり<sup>註19</sup>。或は余を以て悪時代精神の代表者となし、或は醜的生活を鼓吹するものとなし、或は教育を無視するものとなし、或は余が公開演説を曲解して、余が高等師範に於ける職責を疑ふものすらありき。」(登張 1902b, 69頁)——登張に言わせれば、自分は純粹に研究上の関心からニーチェ思想を紹介したのに、ニーチェ思想の意義を鼓吹した途端、「悪時代精神の代表者」や「教育を無視するもの」といった罵詈雑言の集中砲火を浴びてしまったということだが、興味深いのは、この時点ですでに登張の高等師範教授職に対して疑義が示されていたことである。ニーチェ思想の教育学的意義を主張していた登張自身が、美的生活論争の渦中でニーチェともどもその存在価値を教育学的見地から否定されていたのである。

登張が美的生活論争に巻き込まれる様子については、坪内逍遙も「帝国文学記者に与へて再びニイチェを論ずるの書」の中で次のように述べている。『『帝国文学』の六、七、八諸号に見えたる君が意見と、高山氏が美的生活論を賛美したる時の君の意見と、天溪氏等に答へたる時の君の意見と、こたび予に答へられたる駁文の意と、彼此相並べて照検すれば頗る奇怪なる疑惑生ず、否、余りに雑然として、いづれが君の本旨なるかを判知するに困む。蓋し『帝国文学』の論説欄にはじめてニイチェを紹介せし君は多少ニイチェヤニズムの極端なるを認めながらも、漠然其の豪放と偉大とを頌して其の人品ひとがらを追慕せるが如き概あり。然るに後に雜報欄に顕はれたる君は、痛く高山氏の本能満足論ほんのんぞんぞんに饗応して、甚しくニイチェの遂欲主義すいよくしぎに随喜し、純乎たる無道德主義者むだうとくしぎたるが如し。而して其の同じ傾向は天溪氏等に対するに及びて更に甚しきを加へ、過日の教育会に於ける放言に至りて其の極に達したるもの、如し。反科学主義をすら

ニーチェそのまゝに奉体せらるゝかの如き口吻も見えたり。(このあたりの証左は君の答弁次第にて、一々に呈出せんこと、いと容易し。)(坪内 1903、479頁)

坪内の見るところによれば、①「美的生活を論ず」発表以前に執筆された『帝国文学』第7巻第6号、7号、8号掲載の「フリードリヒ、ニーチェを論ず」、②第9号掲載の「美的生活論とニーチェ」、③第10号掲載の「解嘲」、④第12号掲載の坪内批判「馬骨人言を難ず」では、登張の見解や主張が互いに食い違っているのだが、坪内がとくに問題視したのは登張が次第にヒートアップしている点、すなわち①の段階ではニーチェ思想が極端な個人主義であることを認めていたにもかかわらず、②の段階では高山に影響されニーチェの遂欲主義に随喜渴仰し、③や④の段階では過度な無道德主義や反科学主義に陥っている点であった。つまり坪内に言わせるなら、登張は、美的生活論争に絡め取られることによって、当初持ち得ていた独文学者としての冷静さを失い、青少年に悪影響を及ぼす危険なニーチェ主義者となってしまったのである<sup>註20</sup>。

美的生活論争をニーチェ論争へとシフトさせたのは登張だが、そこで展開された議論は、青少年に対するニーチェ思想の影響力や効果という教育的問いであった。そして、登張はその教育的論争に敗れた。論争それ自体は互角だったかもしれないが、文部省からの通達によって東京高等師範学校教授職を辞したという結果に関して言えば、登張の敗北は明白であろう。高山樗牛が不治の病に倒れた後、登張竹風は、坪内逍遙率いる巨大な敵対勢力を前にニーチェ主義の正当性を主張しようと孤軍奮闘したが、皮肉にも、ニーチェの教育学的意義を強調する言動＝ニーチェ主義の鼓吹そのものが反ニーチェ主義者の目には青少年に悪影響を与える危険な行為と映り、結果的にニーチェ主義は非教育学的であるというイメージを日本中に印象づけてしまったのである。

## 【註】

註1 松原 2023bを参照されたい。

註2 西尾幹二も登張を「翻訳者」と紹介している。「一般に明治時代のニーチェ理解には限界があった。早い時期の翻訳者の生田長江や登張竹風の書いたエッセーの類を見ても、正直、正視するに忍びない。その頃のドイツにおける理解の仕方ですえはなほだ偏頗だったのだから、止むを得ないとも言えるだろう。日本では多くの者が作品を読まずしてニーチェを論じた。ドイツ語が読めず、英訳を用いたというのはまだいい方である。」(西尾 1982、518頁)

註3 たとえば1900年6月発行の『帝国文学』第6巻第6号には次のような一文がある。「ズウデルマンは、悲劇ヨハニスによりて従来の氏が劇及小説に見ることを得ざる難問を解釈せり。所謂ニーチェの個人道德と、博愛主義の道德とに対する氏の解釈は、この悲劇一篇のうちに見ることを得べし。」(登張 1900b、67頁)

註4 これに関連して登張は次のように述べている。「之を要するに美的生活論は、近来最も痛快なる論文なり。



唯本能といひ、悪心といひ、美的といふが如き用語例の、頗る従来の意義と相異なるが為、幾多読者の、その真意を解するに至らず、為めに批評家等の誤解を來し、彼等をして敵なきに矢を放たしむるに至りたるが如きは、吾等苟かに高山君の為に遺憾とする所なり。」(登張 1901f、123-124頁)

註5 実際、登張は「馬骨人言を難ず」の最後で次のように述べている。「この文を草せる時、偶々一友來りて、馬骨人言を草せる人の、文学博士坪内逍遙氏なるよしを告ぐ。余は吾学界のために、この驚くべき報道の、口さがなき京童の訛伝に出たるものあらむを冀ふ。」(登張 1901i、115頁)

註6 ニーチェ思想が危険であるという見解に対し、登張は次のように反論する。「人はその危険ならむを恐る。然れども、余を以て見れば、これ真に杞憂なり。古往今來、いかなる学説思想か、その犠牲を有せざりし者ある。」(登張 1901g、103頁)

註7 坪内逍遙は早稲田派のメンバーと対面したときのエピソードを登張は次のように紹介する。「これより先き、僕は帝国文学紙上にニーチェ論を連載した報いで、早稲田の先生方から包圍攻撃を喰つた。就中最も手痛いのは坪内逍遙先生の馬骨人言(ウマノホネ、ヒトノゴトク、モノイフ)であつた。読売新聞紙上に、匿名で連載せられたのであるが、その筆致文体から、逍遙御大であることは明白であつた。こちらは年少気鋭の客気を駆つて、何度も論陣を張つた。第三回目の僕の論駁が明十日に出るといふその前夜なのだ。紅葉館へ參上した赤門連中は、上田敏・畔柳芥舟・竹風の三名であつた。どうしたものか、吾等三名が床の間に、主賓の次に据ゑられ、主賓の右、即ち正面座には、塚原洪柿園、黒岩涙香等の恐ろしい人々が居並び、逍遙・高田早苗・浮田和民の諸先生は、尾崎紅葉山人と共に幹事役として末席に着席して居られた。宴酣になつた頃、紅葉山人が僕の手を引いて、「君、坪内さんに会わさう、」と云つて、逍遙先生の前へ連れて行かれ、生れて始めて、逍遙先生にお会ひする光榮を有したのであつた。「いろいろ失礼なことを申しまして、」とお詫をすると、先生は、にこ／＼笑つて「いや私こそえらいお叱りを受けて、今度のは、まだ拝見しないが、」とおつしやる。満座大笑した。後で聞くところによると、若し僕が、先生にがむしやりに喰つてかかつたら、したたかにぶんなぐるべく、兎玉花外・正宗白鳥・徳田秋江の連中が拳を固めて用意をしてみたのださうである。さても／＼恐ろしかりけることどもなりでありました。」(登張 1934、71-72頁)

註8 坪内は1897年2月、雑誌『教育壇』に「文学の体用を論じて其の年少者に於ける影響に及ぶ」と題した一文を寄稿し、「予は文学を論ずる時に於ては常に詩歌の獨立を主張し其の出世間的なる本性を論弁すれども一たび世間的立脚地に立ちて教育の側面より文学を論ずる時にはあくまでも文学の危険なるを説かざるを得ず」(坪内 1897、70頁)と、文学者ではなく教育者の立場から青少年に対する文学の危険性について警鐘を鳴らしていた。

註9 「春興放語」には「似而非教育」という一文も収録されており、教育界に蔓延する束縛主義への批判が展開されている。「今の教育家先生は常識円満主義を説いて居る。是が今日の教育主義である。併ながら其常識円満主義は人を一種の模型に入れて、機械的に人を拵へる如きやり方をするのである。一方に於ては教育なるものは開発主義であるなど、云つて居りながら、其実は束縛主義であつて、今日の教育者は皆之をやつて居るのであります。是は明かなる事実である。私は此束縛と云ふことは今日の世の中にはあり得べからざること、考へるのでありますが、未來國民養成者たる教育者が其本家本元たりといふに至ては實に唾然たらざるを得ない。」(登張 1906b、354-355頁)

註10 登張は1903年9月に『新教育論：芸術篇』を出版し、ニーチェの名前こそ出さないものの、東京高等師範学校教授の肩書きで日本の教育界を次のように批判している。「今の教育は形式主義也、これ吾等の忌むところ也。今の教育は模型主義也、これ吾等の恐るゝところ也。今の教育は常識主義也、これ吾等の蛇蝎視するところ也。(…略…)形式を重んじて實質を軽んじ、模型を貫びて人格を賤しみ、常識を崇拜して天才を虐遇す。甚しいかな、今の教育の弊や。」(登張 1903、緒言1頁)

註11 登張は当時の状況を自伝で次のように振り返る。「味方と致しては、「太陽」の犂牛だけで、そのころ、あの有名な「文明批評家としてのニーチェ」を草した上、時文評論で、大いに難有い声援を与へてくれたのはあるが、間もなく病氣になつて、日蓮聖人に転向してしまひ、まあ申さば、四面楚歌の声ばかり、心細いこと限りもない形勢で、全くの孤軍奮闘、若い元気で書きなぐつたのであつたが、翻つて思ふに、或思想の宣伝な

んど申すものは、反対の声が大なるだけ、それだけ、反響の声は大きくなる道理で、結局逍遙先生及び早稲田の文士達は挙つて、豎子をして名を成さしめた難有い世話人になつた訳である。」(登張 1934、236-237頁)

註12 嘉納治五郎がギリギリまで登張に寛容であつたことは以下の証言からもうかがえる。「それはそれで可いとして、善くないのは僕の教育家たる職責だ。当時、僕は、高等師範学校の先生をしてみた。太つ腹の嘉納校長なればこそ、前後四五年の間、僕の言論に対してお小言一つ賜はらず思ふがまゝ、に言ふがまゝ、に放任して置かれたのであらう。ところが文句は外部から起つて来た。」(登張 1934、237頁)

註13 『人生の妙味』の「序」において久津見は次のように述べる。「此書四百頁に足らざる小冊子なれども、余が数年の読書冥想と一歳の執筆とを以て成れる余に取りての一大文章なり。『人生の妙味』と題したるも、本題は高島米峯君の忠言に因て命じたるものにて、元は『超人教』と題し置けるもの也。」(久津見 1911、序1頁)——このように、ニーチェ主義者の久津見はもともと本書に『超人教』というタイトルをつける予定だったが、周囲の忠告で思いとどまったという。ただ、西尾も指摘しているように、「同書は刊行後一ヶ月にして、発禁処分となつた」(西尾 1982、530頁)ようである。

註14 西尾も次のように述べている。「附録に「文部省とニイチェニズム」という論文がついていて、登張竹風がニーチェを信奉したために文部省の忌諱に触れ、明治三十九年高等師範教授を論旨免官された事件を取上げ、官吏社会にみられる「専制主義の頭脳」を言葉鋭く告発している。」(西尾 1982、530頁)

註15 久津見は次のように述べている。「余は文部省が吾人の憲法に保障せられたる自由を蹂躪せんとするものなりと断言するを憚らず。」(久津見 1911、420頁)

註16 久津見は、同じニーチェ主義者として登張にこうエールを送る。「ニイチェニズムを語るも、アナーキズムを談ずるも、何等の干渉を受くる所あらず。唯時に政府が余の著述の発売を禁止するが如き遺憾事ある耳。抑も亦長官の御目玉を喰ひて恐縮せざるを得ざるが如き煩累耐へがたきことなし。余は暫く之を唯一の幸福とせん。竹風彼れも亦早く其職を抛ちて以て此幸福を味へよかし。」(久津見 1911、420-421頁)

註17 東京高等師範学校教授職は1906年に依願免官することになるが、1910年には第二高等学校教授として赴任し、1927年に退職するまで長年教職に従事した。

註18 登張は1924年にドイツでニーチェの実妹エリーザベトと対面し、日本でニーチェ主義を牽引したことに対して労いの言葉をかけてもらっている。「千九百二十四年の十月二日ドイツはワイマルのニーチェ文庫を訪問した。こゝには、ニーチェの妹さんが、その当時七十八歳の高齢で文庫を監理してみた。ワイマルの閨秀作家クラーツエ女史の紹介状を携へて罷り出ると、直ぐ通された。これより先き、阿部次郎君あたりが話して置いたものと見えて、妹さんは、よく僕の名を覚えてゐて、会ふと直ぐ、「お前が登張さんか。お前は、私の兄のために戦ひ、私の兄のために苦しんだのだと聞いてゐる、有難い、」といつて落涙して、握手された時は、嬉しいうやうな、悲しいうやうな、恥かしいやうな、くすぐつたいやうな気持であつた。」(登張 1934、240-241頁)

註19 登張は当時の状況を後年こう回顧している。「四、五号続けてゐるうちに、どうした機勢であつたか、よくよく反時代的思想であつたゆゑか、いはゆるニーチェ主義なるものに向つて、諸方から恐ろしい反対の声が起つた。第一に、早稲田の島村抱月が起つた、新小説の後藤宙外が起つた。太陽・中学世界等で長谷川天溪が起つた。たうとう御大の坪内逍遙先生までが、例の円転滑脱な戯文めいた筆致で、「馬骨人言」(ウマノホネノゴトクヒトモノイフ)と題して、匿名で、読売新聞紙上、手痛い攻撃を向けて来た。「私にも倅がござるが、このごろニーチェとやら本能主義とやら、恐ろしいことを聞き込んで来て、親のいふことは聞き入れ申さず、弱り切つてをりますぢや……」といつたやうな書き出しで真綿で、首を締めるやうな強意見、いよゝ大変なことになつてしまつた。」(登張 1934、235-236頁)

註20 ニーチェ思想が危険視されたことについて、登張は後にこう述べている。「今日から考へると、ニーチェの思想が危険思想である、なんどとは、想像だもつかないことであらうが、いはゆるドイツの個人主義の如きも、依然として利己主義同然に心得られ、少しでも超国家式の言論をすれば、直に訳もなく非国民呼ばわりをされる世の中なのだから、三十年前にあつて、日本離れのした思想を説いた人々が、危険視されたのは、当然過ぎるほど当然であつたかも知れない。」(登張 1934、239-240頁)

【参考文献】

- 清松大 2022 「戯画化されるニーチェー「滑稽」と「諷刺」の模倣—」国際日本文化研究センター編『日本研究』第64集、91-106頁。
- 久津見蔵村 1911 『人生の妙味』丙午出版社。
- 笹淵友一 1953 「高山樗牛とロマンティシズム」『東京女子大学論集』第4巻第1号、71-93頁。
- 修斌 2003 「魯迅のニーチェ理解について—高山樗牛との比較検討を通じて—」『敬和学園大学研究紀要』第12号、255-273頁。
- 杉田弘子 2010 『漱石の『猫』とニーチェ—稀代の哲学者に震撼した近代日本の知性たち—』白水社。
- 高山林次郎 1901a 「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」『太陽』第7巻第1号、17-25頁。
- 高山樗牛（樗牛生）1901b 「美的生活を論ず」『太陽』第7巻第9号、33-39頁。
- 坪内雄蔵 1897 「文学の体用を論じて其の年少者に於ける影響に及ぶ」『教育壇』第1号、66-72頁。
- 坪内逍遙 1898 「方今の小中学徳育及び其の弊」『早稲田文学』第7年第7号、24-35頁。
- 坪内雄蔵 1899a 「方今の倫理教育に就きて（再び）」『日本教育』第1号、3-7頁。
- 坪内雄蔵 1899b 「現行諸倫理教育方案の根本的誤謬」『日本教育』第4号、4-11頁。
- 坪内雄蔵 1899c 「現行倫理教案の根本的誤謬（承前）」『日本教育』第6号、1-9頁。
- 坪内雄蔵 1903 『通俗倫理談』富山房。
- 登張信一郎 1900a 「独逸の輓近文学を論ず」『帝国文学』第6巻第5号、21-34頁。
- 登張信一郎 1900b 「独逸の輓近文学を論ず（承前）」『帝国文学』第6巻第6号、58-67頁。
- 登張信一郎 1900c 「独逸の輓近文学を論ず（承前）」『帝国文学』第6巻第7号、11-20頁。
- 登張信一郎 1901a 「ニイチエの自伝」『帝国文学』第7巻第1号、127-129頁。
- 登張信一郎 1901b 「フリードリヒ、ニイチエを論ず」『帝国文学』第7巻第6号、1-11頁。
- 登張信一郎 1901c 「フリードリヒ、ニイチエを論ず（承前）」『帝国文学』第7巻第7号、8-15頁。
- 登張信一郎（無署名）1901d 「視学官諸君に寄す」（雑報）『帝国文学』第7巻第7号、116-121頁。
- 登張信一郎 1901e 「フリードリヒ、ニイチエを論ず（承前）」『帝国文学』第7巻第8号、12-21頁。
- 登張竹風 1901f 「美的生活論とニイチエ」『帝国文学』第7巻第9号、121-124頁。
- 登張竹風（無署名）1901g 「解嘲」『帝国文学』第7巻第10号、99-109頁。
- 登張信一郎 1901h 「フリードリヒ、ニイチエを論ず」『帝国文学』第7巻第11号、23-37頁。
- 登張竹風（竹風生）1901i 「馬骨人言を難ず」『帝国文学』第7巻第12号、106-115頁。
- 登張竹風 1902a 『ニイチエと二詩人』人文社。
- 登張竹風 1902b 「馬骨先生に答ふ」『帝国文学』第8巻第2号、69-77頁。
- 登張信一郎 1902c 『気焔録』金港堂。
- 登張信一郎 1903 『新教育論：芸術篇』有朋館。
- 登張信一郎 1904 『読書と修養』国光社。
- 登張竹風 1906a 「男女学生交際論」『中央公論』第203号、6-10頁。
- 登張信一郎 1906b 『舌筆録』春陽堂。
- 登張竹風 1907 「批評難」『中央公論』第216号、73-74頁。
- 登張竹風 1908 「情死と時代思潮」『明治学報』第126号、50-60頁。
- 登張竹風 1909 「蒼白き罪人」『刑事法評林』第1巻第2号、66-74頁。
- 登張竹風 1934 『人間修行』中央公論社。
- 西尾幹二 1982 「この九十年の展開」高松敏男・西尾幹二編『日本人のニーチェ研究譜：ニーチェ全集別巻』白水社、509-536頁。
- 長谷川天溪 1905 『文芸観』文明堂。
- 松原岳行 2023a 「明治期のニーチェ主義と教育学（1）—非学問的なニーチェ思想の学問化—」『九州産業大学国

松原 岳行

『国際文化学部紀要』第81号、15-38頁。

松原岳行 2023b 「明治期のニーチェ主義と教育学（2）—高山樗牛と坪内逍遙の教育的対決—」『九州産業大学  
国際文化学部紀要』第82号、21-54頁。

**【付記】**

本研究はJSPS科研費JP21K02275の助成を受けたものです。